

「国連 ESD の 10 年」後の環境教育推進方策懇談会第 4 回会合における  
各委員の発言の概要

1. ESD とは・「ESD の 10 年」の取組の振り返り

- ESD の 10 年が始まるまでの経緯で、地域を重視していくという考え方が、時代背景の中にあり、その認識も含めて視点として入れてはどうか。(小川委員)
- 日本からの提案であるが、NGO を含めた広範な主体が連携できた背景には、NGO と政府が共同提案したということを含めてほしい。(阿部委員)
- ESD が出てくるまで、個々の現場ではベオグラード憲章を一つの目標にしていた記載が必要。(棚橋委員)
- グローバルに考えるということの重要性をもっと強調すべき。実際のアクションが小さくまとまってしまわないよう配慮も必要。(関委員)
- 環境省の 21 世紀環境立国戦略で、低炭素と循環型社会、それから自然共生の社会、この三つが相まって、持続可能な社会になるような書きぶりがわかりやすい。(実平委員)
- 図があると、もっとわかりやすいので、たくさん載せてほしい。(さかなクン委員)
- 持続可能性を構成する前提概念のところにもつながっていくところを、ニュアンス的に書いていただきたい。(小澤委員)
- 環境系 NPO/NGO が、次世代を組織の中でどう育てるか、瀬戸際に来ており、ジャパンレポートの中間年も、そのところが少し足りないような感じがする。(小澤委員)
- これまでの環境教育はトビリシ宣言で来ており、その中に今回の ESD につながるものが入っている。(阿部委員)
- ESD を通じて学ぶ力だけではなく、つなぐ、つながるという、統合化と総合化が ESD によって促進されてきた。トータルな視点が非常に大事。(阿部委員)
- 持続可能な社会のビジョンを描いて、具体化していくバックキャストिंगに立った人材育成が必要。(阿部委員)
- ESD により育む力で、「ESD の目標」を達成するには、世代間の公平、さらには世代内の公平とかが必要。(阿部委員)
- 先進国でつくっている 3R の概念が、途上国も含めて通用しない。観点を変えないと回らないような事態も生まれているので、一体化して動いている中に起こってくる問題として捉える必要がある。(小川委員)
- ESD を進めるときに、発達に合わせた切り分け等を示す必要がある。(棚橋委員)
- 企業と NPO/NGO との連携で、いずれも協働の事例ということで、「つなぐ」というキーワードにも関係するところなので、そんな切り口でまとめてほしい。(関委員)
- 4 年生までは豊かな感性、物事の因果関係、あるいは自分の思考回路を育てる、そういう学習につなげていくような書きぶりが大事。(小澤委員)
- 「身につける能力・態度」というものにつながっていくところがあり、もう少しわかりやすく書くことが必要。(小澤委員)
- ESD を進めるには、学校は非常に重要な現場(場所)であるが、地域も重要である。ESD により、地域丸ごと、持続可能な地域に変えていく、まさに再生していこうところが、この報告書を見て元気になれるようになれば良い。(阿部委員)
- 有機的に事業、人をつないでいくということをもっと具体論として落としつけていかないと、実際の動きの中ではつながっていかない。(小川委員)
- 一番大事なものは地域力。その地域力を高めていくため、人材育成により成し得るかというところが、もっと落とし込んだ具体論のところに入るのではないかと。(小川委員)
- 新しい社会づくりの担い手の場として、つなげられるような展開も必要。(小川委員)

## 2. 環境省におけるESD推進に向けた課題・環境省における今後の環境教育の推進方策

- 各事業ごとに、それぞれの振り返りというものが必要。(川嶋委員)
- 「新たに施策を考える必要はないではないか」ということにならないか。結果として、成果としてどうだったのかということが一番必要。(川嶋委員)
- 一番いいのは、それぞれの取組がどうだったかということが書かれること。(川嶋委員)
- 事例の取り上げ方というのをうまく工夫する必要がある。今後の課題につながるような、そこから何が得られるかということがうまく浮き彫りになるような書き方をする必要がある。(関委員)
- 一番期待していることが、書かれていない。今後の推進方策の連携・支援体制の整備、環境省と文科省の連携のことが何とか書けないのか。(川嶋委員)
- 連携といったときに、いろんな組織と連携が必要。属人的な話ではなくて、組織としてやるという仕組みが必要。(阿部委員)
- 連携・支援体制の整備というところで、ナショナルセンターというようなものが必要だと思うが、同時に、ナショナルセンターが全てできるわけではなくて、問題は地域。(阿部委員)
- いろんな地域で、持続可能な地域をつくっていくために一緒にやっっていこうというのができつつあるが、そういうところを支援し、相互に補完していくという位置付けのナショナルセンターが必要。(阿部委員)
- 地域といったときに、既存の仕組みを十二分に活用しながらそこでは足りないものを、どう入れ込んでいくのか。文科省あるいは総務省といったいろんな省庁との連携、そういったところをこういう横串にするような仕組みを提案いただきたい。(阿部委員)
- 課題について、誰が、何を、いつまでに、どのようにやるかという、5W1Hの視点が欠けている。(実平委員)
- 文科省と環境省の連携というのは、やはり重要なこと。(棚橋委員)
- ドイツでESDコンピテンシーというものをつくって、それに向けて、いろんな行政機関が関わっていくという、そういう仕組みづくりというのが必要。(棚橋委員)
- 大きなプログラムのグランドデザインというものが必要。(棚橋委員)
- 既にやっていることをより強調することが必要。(小澤委員)
- 人の社会もいろんな仕事があり、どうつながっているかということをつなげて考えていくことがわかりやすいのではないか。(さかなクン委員)
- 人においては、目的や、目標や、考えたり、思いやりの心とかをESDに結びつけると、幅広くみんなで考えることができるのではないか。(さかなクン委員)
- 持続可能性ということをどこで実感できて、自分の身近な問題として感じるかという、割と身近なコミュニティというエリアぐらいまでである。(小川委員)
- 地域視点、地域理解というところをもう少し何か言葉としても入れておく必要がある。地域理解が、単に地域の物知り博士だけではなくて、地域情報をうまくトータルに見ることができるような情報の整理も重要なこれから仕事になってくる。(小川委員)
- 持続可能な地域、都市も含めてどうやってつくっていくのか。そして、日本全体のグランドデザインをどうしていくのか。世界との問題の中へ位置づけていくことが必要。書きぶりとして、もっと大胆に打って出ても良いのではないか。(阿部委員)
- 「今後の進め方」の中で、例えばイノベーションとかという言葉が使えないか。(関委員)
- 一本調子の物の見方、展開ではなくて、多元的につないだときに、その結果を見て、そこからまた発想を広げて、地域づくりとかのアプローチも大事。(小川委員)

以上